

# 令和7年度 自己評価及び学校関係者評価書

令和 8 年 3 月 2 日

札幌市立 平岡中央小学校

## 1 今年度の重点目標

自信と思いやりをもち、明るい笑顔があふれる学校  
～自分を大切に みんなを大切に～

## 2 本年度の経営方針

学が力の育成、豊かな心の育成、健やかな体の育成、子どもの発達への支援、信頼される学校の創造  
特に、非認知能力の育成、人間尊重教育の充実、命を大切にする指導の充実、運動と学習の関係を重視

## 3 自己評価結果に対する学校関係者評価

分野	重点項目	評価項目	自己評価		学校関係者評価	
			達成状況	改善方策	自己評価の適切さ	改善策の適切さ
目指す子ども像	向上心をもち続け、たくましく生きる子どもの育成	児童は自分の考えをもち、友達にやさしく接し、学びや遊びに夢中になって主体的に行動している。	A	児童は自分の考えをもち、友達にやさしく接し、学びや遊びに夢中になっている様子があり、知徳体に関するアンケートで80%以上の肯定的回答として表れている。一方、教職員としては、主体的に取り組む姿勢の共有や考えを深める機会など、児童のさらなる成長につながる手立てを検討し、実践していきたい。	A	A
学校関係者評価委員会による意見		目指す子ども像に関する取組については、児童・保護者アンケートの結果からも、これまでの努力の成果が着実に表れていると評価できる。一方で、現状に満足して自らを100点満点とせず、さらなる向上を目指すとする姿勢は高く評価できるものである。今後においても、子どもを第一に据えた教育活動を継続し、一層の充実と発展を図っていくことが期待される。				

人間尊重の教育	自信と思いやりをもち、明るい笑顔があふれる学校	児童は自他を尊重し、自信と思いやりをもって行動し、明るい笑顔があふれる学校づくりに努めている。	A	児童アンケートや保護者アンケート、教職員アンケートにおいて、本項目に対する肯定的な回答の割合は90%に近く、記述内容からも児童が自信と思いやりをもち、明るく笑顔で学校生活を送っている様子がうかがえる。次年度以降も、一人一人の個性を大切にしながら、人間尊重の教育をさらに推進し、より一層安心で明るい学校づくりに取り組んでいきたい。	A	A
「学が力」の育成	学習評価を指導方法の改善に生かした主体的・対話的で深い学び（課題探求的な学習）の実現	児童は基礎的な知識を確実に習得し、それを基盤に課題探求的な学習に取り組んでいる。	B	児童は基礎的な知識を確実に習得し、それを基盤に課題探求的な学習に取り組む様子があり、アンケートや選択・計算の習熟の機会からうかがえる。一方、学力テストや保護者アンケートからは基礎的な定着や学が力の向上への期待が示されており、次年度も学年で身に付けさせた力を明確にし、着実な定着を目指す取組を進めていきたい。	A	A
「豊かな心」の育成	多様性を認め、自他を大切にする心の育成	児童は多様性を認め、命や人権を尊重する意識を高める活動に積極的に取り組んでいる。	A	児童は多様性を認め、命や人権を尊重する意識を高めることに積極的に取り組んでおり、アンケートでは児童・保護者・教職員ともに90%前後の肯定的な回答となった。特に児童アンケートでは94%と、多くの児童が自分や周囲を大切にする意識をもっていることがうかがえる。一方で子ども同士のトラブルも見られるため、次年度以降も相手の気持ちを察する力や仲間意識、コミュニケーション能力を一人一人に応じて育てていきたい。	A	A
「健やかな体」の育成	生涯にわたる健康な体づくりを支える生活習慣の形成	児童は安心して過ごせる環境の中で、健康な体づくりに必要な生活習慣の形成に積極的に取り組んでいる。	B	児童は安心して過ごせる環境の中で、健康な体づくりに必要な生活習慣の形成に取り組んでおり、児童・教職員アンケートでは約5%の肯定的な回答があった。一方、保護者アンケートでは76%と、運動・食事・睡眠の面でさらなる伸びしろが見られる。次年度は養護教諭や栄養教諭の授業を継続するとともに、学校の取組を家庭により発信していきたい。	A	A
いじめ対策	人間尊重を基盤としたいじめの未然防止・早期発見と組織的対応の徹底	いじめの未然防止と早期発見、組織的対応に計画的に取り組んでいる。	B	学校では、いじめの未然防止や早期発見を重視し、年2回のアンケートやシャボテンログを通じて子どもへの関わりを密にしてきた。その結果、いじめの兆候に迅速に対応し、関係修復まで進められるケースも多く見られた。一方で情報共有が事後になる場合もあつたため、次年度は共有をより迅速に行い、安心・安全な学校づくりをさらに進めていきたい。	A	A
一貫性・連続性のある教育(小中一貫した教育)	家庭や地域、幼稚園・保育園や中学校と連携した学校づくりの推進	小中連携を軸に、家庭や地域、幼稚園・保育園と連携した学校づくりに努めている。	A	平岡中央中学校区の3校によるグランドデザインをもとに、CSに向けた小中連携を進めた。春の研究集会では子どもの実態理解を深め、知徳体などのテーマでグループ交流を行い、生徒会と児童会のオンライン交流や中1と小6の交流も実施した。地域の幼保連携では子ども園の保育参観を通して相互理解を深めた。次年度もCSを意識したさらなる連携を図り、春の研究集会の発表校として準備を進めていきたい。	A	A
学校関係者評価委員会による意見		評価の高い項目と低い項目が見られる点については、子ども・保護者・学校それぞれが設定する到達目標の違いが影響しているものと考えられる。とりわけ重要なのは、子どもが学がことに対して意欲を失わないようにすることであり、その実現に向けては地域としても協力していく必要がある。また、子どもの豊かな心を育成するうえで読書活動は極めて重要であることから、蔵書数の充実や司書の配置など、読書環境の体制整備についても改善が求められる。				

学校独自に設定する分野	日常の学習や学校生活を通して、児童の非認知能力育成に意図的に取り組んでいる。	B	学級・学年・学校として、日々の学習や行事を通して児童の自己肯定感や協調性の育成に努めており、児童アンケートでも各項目で80~90%の肯定的回答が示されている。一方で、教職員間での情報共有にはまだ課題があり、子どもへの価値づけをより計画的に行えるよう、次年度も取り組んでいきたい。	A	A
	多様性と人権を尊重する視点をもって、教職員が日常的に指導に取り組んでいる。	A	教職員アンケートでは83%が肯定的に回答しており、多様性や人権尊重に関する意識が全教職員に浸透し、日々の指導に生かされていることがうかがえる。今後も、児童一人一人のニーズに応じた指導を継続し、さらに丁寧な支援を行ってきたい。	A	A
	教職員の協働と働き方改革による持続可能な学校運営の推進	B	同僚性を意識した研究体制が良好な人間関係づくりに貢献している一方、情報共有や担任の支援体制が十分でない面や、会議等により放課後時間の制約も見られた。次年度は日語を見直して放課後にゆとりを持たせ、会議を精選して必要な事項に時間をかけられるようにするなど、持続可能な学校運営の取組を整備していきたい。	A	A

学校関係者評価委員会による意見  
学校独自に設定した分野における自己評価および改善方策については、概ね妥当であり、その方向性に賛同できる内容である。一方で、教職員の多忙化は社会的にも大きな課題となっており、教育の質を維持・向上させる観点からも、可能であれば30人学級の実現が望まれる。また、「チーム担任制」といった新たな取組についても、その実現可能性を含めて検討を進め、子どもにとっても教職員にとっても、より良い教育環境の構築を目指していくことが求められる。